

ヨハネによる福音書9章 「盲人に現れる神のわざ」

1A 目に留められるイエス 1-5

1B 神のわざ 1-3

2B 世の光 4-5

2A 遣わされた者 6-12

1B 目の泥を洗う盲人 6-7

2B イエスという人 8-12

3A パリサイ人の裁定 13-23

1B 預言者 13-17

2B 恐れによる証言の忌避 18-23

4A ユダヤ人からの追放 24-34

1B 「今は見える」証言 24-25

2B 神から出ておられる方 26-34

5A イエスの礼拝 35-41

1B 人の子 35-38

2B 「見える」という盲目 39-41

本文

ヨハネによる福音書9章を始めます。イエス様は、7章の仮庵の祭りでエルサレムに上られてから、まだエルサレムに留まっておられます。前回の8章では、姦淫の現場で捕らえられた女がいて、その後でご自身をユダヤ人たちに「わたしは世の光です」と言われ、罪からの自由を説かれました。ご自身が、「わたしはある」ということ、つまりモーセに現れた主ご自身であることを宣言されたら、彼らは石打ちにしようとしたのです。それで主は、宮から出ていかれました。その後の話になりますが、これまでイエス様は、「わたしは父から遣わされた者です」とご自身を紹介されていました。今度は、イエス様が盲人を癒し、人々にその証しをするように遣わされます。

1A 目に留められるイエス 1-5

1B 神のわざ 1-3

1 さて、イエスは通りすがりに、生まれたときから目の見えない人をご覧になった。2 弟子たちはイエスに尋ねた。「先生。この人が盲目で生まれたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。両親ですか。」3 イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるためです。」

イエス様が通りすがったのは、おそらく神殿の境内を出るところでした。使徒の働き3章で、ペテ

口とヨハネが祈るために宮に来た時、「美しの門」に、生まれつき足の不自由な人が施しを求めていた場面がありますね。当時、福祉制度がない時に、障害者の人はこのように人々の善意による施しによって生きていました。そして、聖書には貧しい人への施しを命じているので、それで礼拝をする人々のところで物乞いをするのは、ありふれた光景でした。

その中で、イエス様が、「生まれたときから目の見えない人をご覧になった」とあります。これは、単に見えたということではありません。注意して、関心をもって見たということです。そして、これから神のわざをこの男に対して行われます。いつもの光景があつて、しかしイエス様が目に留められて、そしてこの人の目が見えるようになるということです。イエス様が主権的に、選びをもってこの男にご自分の働きをなされるということです。すべての人に、主はこの働きを行われます。一方的な神の憐れみによって、私たち一人一人に目を留め、選び、救いと癒しのわざを行われます。

そして午前礼拝で詳しく説明したことに入ります。イエス様が目に留められたので、弟子たちは、当時ユダヤ教が、このような苦しみを罪からくるものだと思っていたその理解をもって、イエス様に尋ねられます。「先生。この人が盲目で生まれたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。両親ですか。」先生、と言っていますね。ユダヤ教のラビとして、どう教えてくださいませんか？ということです。けれども、イエス様はどちらでもないと言われます。むしろ、「この人に神のわざが現れるため」ということです。

ここに、キリスト教の価値観の根幹が記されていることを午前礼拝で話しました。確かに、個々の罪によって私たちが病になることはあります。例えば、婚外の性行為をすれば、それだけ性病に罹る可能性が大きくなります。しかし、聖書は、アダムが罪を犯して、世界に罪が入り、それで死が世界に入ったことを教えています。ですから、病に罹ったからといって、その人個人の罪とは限らないのです。ところが、人はどうしても「なぜ？」という原因を知りたい、理由を知りたいと願うのです。知りたいと思うのです。それで、その原因探しのために、両親なんか、母の胎で犯した本人の罪なのかという、そういった議論をするのです。それが、ユダヤ教の教えの中に入り込んだように、キリスト教会の中でも入り込むことがよくあります。

しかし、神は、そうした人間の「知りたい」という欲望に答えられません。それは、善悪の知識の木でもあるのです。神は、「わたしが神である、わたしを信じなさい。わたしを仰ぎ見なさい。」と命じられます。善悪の知識の木には命はありません、死があるのです。そうではなく、いのちの源でられる神につながることを命じておられるのです。そして神に遣わされたキリストに、神のいのちがあるのです。

そして大事なことは、神は、アダムの罪の結果である苦しみの只中で、ご自分のわざを行われるということです。ここがキリスト教の精髓と言ってもよいでしょう。私たちは障害者を見ると、ど

う見るでしょうか？なぜ、この人たちは不自由で、私たちが五体満足なのか？と見るでしょうか？ダウン症の人はどうなのか？しかし、身体が不自由な人々を用いて、神はまことの自由を人々に伝える器としておられます。どれだけの人が、星野富弘さんの絵画を通して勇気づけられたでしょうか？もしかしたら、自殺願望を持っていた人が救われたかもしれません。そして、もちろん魂の救いを得た人たちも多いことでしょう。神は、苦しみに対して明確な目的を持っておられます。なぜか？には答えられません。しかし、「何のため？」には明確にお答えになっています。それが、「神のわざが現れ、神の栄光に至るため」なのです。

2B 世の光 4-5

4 わたしたちは、わたしを遣わされた方のわざを、昼のうちに行わなければなりません。だれも働くことができない夜が来ます。5 わたしが世にいる間は、わたしが世の光です。」

仕事をする時は、その多くが昼の内に行います。それと同じように、わたしは昼のうちに自分の働きを行わなければいけない、ということです。その昼また夜とは何でしょうか？それは、「ご自身が世から取られる」ということが、いわば夕暮れであり、夜に入ることを意味しています。主が十字架に付けられ、三日目によみがえり、そして天の昇られるのですが、それまでのことを昼に喩えておられます。もうひとりの助け主であられる聖霊が遣わされたら、その方が私たちに照らして下さいますが、主イエスご自身は今、地上におられる間だけだという意味を込めています。

2A 遣わされた者 6-12

そしてこれから、その光のわざを行われます。盲人の目が開かれます。しかし、イエス様が言われた「光」とは、盲人の目に光が入って来て明るくなるということだけではありません。もっと深い意味があります。

1B 目の泥を洗う盲人 6-7

6 イエスはこう言ってから、地面に唾をして、その唾で泥を作られた。そして、その泥を彼の目に塗って、7 「行って、シロアム(訳すと、遣わされた者)の池で洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗った。すると、見えるようになり、帰って行った。

イエス様が唾を使って、人を癒されることはここが初めてではありません。デカポリス地方で、目が見えず、口のきけない人に、口を開くために唾を使われましたし(マルコ7:33)、目の見えない人に唾をつかって両目に当て、目を開かせました(8:23)。この盲人に対しては、これが薬になるということではなく、信仰を働かせてほしいと願われていたのでしょう。イエス様が言われたことを信じて、行ってほしいと願われました。神殿の境内からシロアムの池までは、相当の距離があります。さりげなく、「彼は行って洗った」とありますが、ずっと都上りの道を下がっていきます。私たちは聖地旅行でシロアムの池の遺跡から上って行きましたが、20分以上はかかったでしょう。ですから、

誰かの援助が必要です。それも含めて、盲人はイエス様の言われることに従いました。

ところで、ここでは象徴的な意味合いもあるでしょう。主ご自身の唾を使って、塵から泥を作っています。人の体を神は塵から造られています、これは神ご自身の口から出たもので、人の体を造る行為さえも思い起こさせるものです。そして、シロアムというのは「遣わされた者」という意味です。イエス様に与えられた命をもって、人々に遣わされていく、ということがあるでしょう。

2B イエスという人 8-12

8 近所の人たちや、彼が物乞いであったのを前に見ていた人たちが言った。「これは座って物乞いをしていた人ではないか。」9 ある者たちは、「そうだ」と言い、ほかの者たちは「違う。似ているだけだ」と言った。当人は、「私的那个人です」と言った。

非常に興味深いです。7章において、イエス様が仮庵の祭りで教えられた時に、この方は預言者かもしれない、キリストかもしれないという声があったのですが、「いいや、ただ惑わしているだけだ」として、分裂が起きました。今、イエス様に目を開けていただいたという証しをもっていたので、それはイエスご自身によって分裂したように、人々の間に分裂が起きます。ここでは、至極当たり前のことですが、人はなかなか認めたがりません。人々は毎日のようにして、この元盲人を見ていました。だから誰もが知っています。それで、「これは座って物乞いをしていた人ではないか。」となるのですが、他の人たちは「似ているだけだ」と言います。彼の目が開いたという事実さえも、そんなことはあり得ないとして認めないために、「似ているだけだ」と言っています。

そこで、この元盲人が証言となります。彼は、そのまま「私的那个人です」と言います。彼の証しは、とても単純です。これから、彼自身は何度も何度も、自分の経験したこの単純な事実を証していくこととなります。なぜなら、人々が認めたくないからです。

10 そこで、彼らは言った。「では、おまえの目はどのようにして開いたのか。」11 彼は答えた。「イエスという方が泥を作って、私の目に塗り、『シロアムの池に行って洗いなさい』と言われました。それで、行って洗うと、見えるようになりました。」12 彼らが「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と答えた。

この男はそのまま、事実を語りました。そして、イエスという名の人であることは聞いていたので、その名を告げました。これから興味深いことに、元盲人のイエスについての証言が変わっていきません。自分が生まれつきの盲人なのに、それを直されたということは、イエスは単なる人ではないはず、ということになってきます。しかし、今の段階では「イエスという人」ということで、人であるということだけ話しています。

3A パリサイ人の裁定 13-23

1B 預言者 13-17

13 人々は、前に目の見えなかったその人を、パリサイ人たちのところに連れて行った。14 イエスが泥を作って彼の目を開けたのは、安息日であった。

ここにいる人々は、この人が目が見えなかったに見えたということを楽しんだのではなく、むしろ、パリサイ人たちの所に連れて行ったのです。ベテスダの池の男のことを思い出してください。彼はイエス様によって癒されたのに、癒したのはイエスであるとユダヤ当局に告げたのです。自分がイエス様によって癒された、救われたということ、その救いの喜びを犠牲にして、古い秩序の中に生きようとしたのです。ここにいる人たちも同じく、この盲人の目が開いたことで神をあがめるのではなく、パリサイ派のところに連れて行ったのです。

何が問題か？という、安息日に唾で泥を造って塗った、ということです。パリサイ派の解釈によれば、命に別状のあることでなければ、医療行為も労働とみなし、それをしてはならないと教えていました。口伝律法の中に明確に、「目に唾で作った泥を塗る」というのが安息日に違反する労働として語られていました。だから、イエス様が行われたことは、そのまま彼らの決めた規定に違反することだったのです。

私たちは敢えて、主の命令に従うために、人々の考えている規定に故意に違反する必要はありません。しかし、イエス様が働かれる時に、自分はイエス様の証しを立てているのですから、自ずと人々が大事にしていることにも抗うことを結果的にすることはあります。パウロは、エペソで福音を語っただけですが、そこで魔術を行っていた者たちはその書物を焼いたということが起こりましたし、またアルテミスの神殿の模型が商売あがったりになってしまって、それで銀細工人たちが騒動を起こした、ということもありました。

15 こういうわけで再び、パリサイ人たちも、どのようにして見えるようになったのか、彼に尋ねた。彼は、「あの方が私の目に泥を塗り、私が洗いました。それで今は見えるのです」と答えた。16 すると、パリサイ人のうちのある者たちは、「その人は安息日を守らないのだから、神のもとから来た者ではない」と言った。ほかの者たちは「罪人である者に、どうしてこのようなしるしを行うことができるだろうか」と言った。そして、彼らの間に分裂が生じた。

パリサイ人たちの間で分裂が起こっています。一つは、そのまま彼らの口伝律法に従えば安息日批判だから、安息日を破るような者は神から来ていない、と断じる解釈です。けれどももう一つは、「どうしてこのようなしるしを行うことができるだろうか」という反応です。これは、イエス様は、「5:36 わたしが行っているわざそのものが、わたしについて、父がわたしを遣わされたことを証しているのです。」と言われたとおりです。

ユダヤ教の解釈の中で、これは衝撃的なことでした。先ほど話した通り、生まれつきの盲人は、両親からの罪か、本人の胎内における罪ということになります。けれども、逆を言うと、その呪われたような状態を打ち破るということは、罪を根こそぎ取り除いたというインパクトを持っています。メシアでなければできないこと、という思いがあるのです。イザヤ書には、御国が到来する時は、「35:5 そのとき、目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。」とあります。」ですから、こちらの解釈に傾いている人たちもいて、分裂しているのです。

17 そこで、彼らは再び、目の見えなかった人に言った。「おまえは、あの人についてどう思うか。あの人に目を開けてもらったのだから。」彼は「あの方は預言者です」と答えた。

ここでパリサイ派の人たちが強調しているのは、「おまえは」であります。あなた自身はどう思う？というニュアンスです。彼のイエス様についての認識は、バージョンアップしています。「あの方は預言者です」であります。自分自身は、癒しを受けたのですが、そのインパクト、すごさがじわじわと彼の心の中に、彼の信仰としてしみ込んでいっているのでしょうか。サマリアの女もそうでした、自分の男性の遍歴をイエス様に言い当てられて、「あなたは預言者だと思います」と言ったのと似ています。目を開けていただいたのだから、神の御霊に満たされた預言者でなければ、することはできないと考えたのです。

ここで、証しについて学ぶところがあります。私たちは、自分の見たこと、聞いたことを偽ることは難しいです。そして、聖霊によって証しされたことを偽ることは難しいです。けれども、パリサイ人が喧々諤々言っているように、いろんな神学議論があります。それらには、有益なものもありますが、私たちはそのようなことで自分の内に与えられた聖霊の証しを台無しにする必要はないのです。自分がなぜ、イエスを自分の主、そして神の子として信じ、受け入れられてるか？それは、知識を一生懸命求めたからではなく、この元盲人のように心の中で知ったからです。あなたがたは、いろんなことを言っているが、私にとってイエスは主なのだ、と主体的に証しするのです。

2B 恐れによる証言の忌避 18-23

18 ユダヤ人たちはこの人について、目が見えなかったのに見えるようになったことを信じず、ついには、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、19 尋ねた。「この人は、あなたがたの息子か。盲目で生まれたとあなたがたが言っている者か。そうだとしたら、どうして今は見えるのか。」

本人の証言を信じたくなかったのも、両親ならよく知っているであろうとのことで呼びました。本当に本人なのか、またどのようにして癒されたのか？ということです。

20 そこで、両親は答えた。「これが私たちの息子で、盲目で生まれたことは知っています。21 しかし、どうして今見えているのかは知りません。だれが息子の目を開けてくれたのかも知りません。」

本人に聞いてください。もう大人です。自分のことは自分で話すでしょう。」²² 彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちが恐れたからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者がいれば、会堂から追放すると決めていた。²³ そのために彼の両親は、「もう大人ですから、息子に聞いてください」と言ったのである。

証言を拒みました。言っていることは尤もです。本当のことを言っていますね。彼は証言能力のある大人だから、本人に聞いてほしいとのこと。しかし、彼らのやったことは悪いことだったのです。責任を取りたくなかったのです。多くのことが、責任を取りたくないから行なわない、言わないということがあります。そして責任を取らないのは、恐れているからです。「会堂から追放」とあります。これは共同体から外されることを意味します。会堂とユダヤ人の社会的、文化的な生活は密接につながっていました。今で言うと町内会、コミュニティーセンターのような存在です。そこから外されるということは、自分の生活基盤を失うことにもなりかねません。

これは日本でいうならば「村八分」です。日本では完全な追放でないですね、「八分」とは、葬式と火事の際の消火活動の二分以外は付き合い合わない、という意味です。生き殺しではないですが、そうやって仲間から疎外されることの恐怖心を植え付けます。私たちはまさに、村八分文化に生きています。なぜ、キリストを信じられないのか？「お墓がある」と多くが答えます。「でも、キリスト教式のお墓もありますよ」と言っても、そういう意味ではないのです。共同体の中にいるのに、そこから外れてしまうではないか？という潜在的な恐れです。私たちがこの恐れを持っているので、人々に自分がキリスト者であることを証しすることを拒んでしまいます。それで、キリスト者としての責任ある行動もとらなくて済むようになり、つまり証しを立ててない、ということになります。

4A ユダヤ人からの追放 24-34

1B 「今は見える」証言 24-25

24 そこで彼らは、目の見えなかったその人をもう一度呼び出して言った。「神に栄光を帰しなさい。私たちはあの方が罪人であることを知っているのだ。」²⁵ 彼は答えた。「あの方が罪人かどうか私は知りませんが、一つのこと知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。」

パリサイ人は、彼の目が開いたことについては、不問にしています。そうではなく、安息日に目を開けたというところに焦点を当てて、イエス様が罪人である、律法を違反している者であり、そのことを認めなさい、としています。けれども、元盲人は大胆になっています。第一に、「あの方が罪人かどうか私は知りません」ということです。パリサイ人の解釈ですからこれは、分からないのは当然です。そして、素直です、ここで自分に無理やり回答を強いていません。私がしばしば、神の恵みについて、「ずうずうしくなりなさい」と言いますね？ここで、自分が回答を全て知っているから語るのではなりません。既に知っていることに確信をもって語るのです。

ここで優れているのは、あまりにもはっきりしたことです。「一つのことは知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです」であります。使徒の働きでも、先ほど話した、ペテロとヨハネを通して足が治った男ですが、サンヘドリンは、「使 4:14 そして、癒やされた人が二人と一緒に立っているのを見ては、返すことばもなかった。」とあります。これは、私たちキリスト者の証しです。「以前は見えなかったけれども、今は見えています。」であります。これだけ単純で、明らかな証しです。

2B 神から出ておられる方 26-34

26 彼らは言った。「あの人はおまえに何をしたのか。どのようにしておまえの目を開けたのか。」
27 彼は答えた。「すでに話しましたが、あなたがたは聞いてくれませんでした。なぜもう一度聞こうとするのですか。あなたがたも、あの方の弟子になりたいのですか。」
28 彼らは彼をののしって言った。「おまえはあの者の弟子だが、私たちはモーセの弟子だ。29 神がモーセに語られたというのを私たちは知っている。しかし、あの者については、どこから来たのか知らない。」

元盲人はかなりイラついていますし、また強気に出ています。そしてパリサイ人は、ついに罵っています。モーセが神の言葉を受けたのであり、あの者は知らないのだと言っています。

30 その人は彼らに答えた。「これは驚きです。あの方がどこから来られたのか、あなたがたが知らないとは。あの方は私の目を開けてくださったのです。31 私たちは知っています。神は、罪人たちの言うことはお聞きになりませんが、神を敬い、神のみこころを行う者がいれば、その人の言うことはお聞きくださいます。32 盲目で生まれた者の目を開けた人がいるなどと、昔から聞いたことがあります。33 あの方が神から出ておられるのでなかったら、何もできなかったはずです。」

元盲人の信仰が、皮肉にもパリサイ派と激しいやり取りで、育ってきています。彼は、はっきりとこの方が目を開けてくださったことを知っています。彼らが問い詰めてくるので、ますます、そんなことは、神から来られた方でなければすることができないと語気を強めます。神が罪人の祈りは聞かれない、という言葉は、罪を犯している者がへりくだって、悔い改める祈りのことを指しているのではなく、むしろ心は神から離れているのに、口先だけの祈りをしている場合です。「イザ 1:15 あなたがたが手を伸べ広げて祈っても、わたしはあなたがたから目をそらす。どんなに祈りを多くしても聞くことはない。あなたがたの手は血まみれだ。」

ですから、イエス様が目を開けてくださったということは、神が御心にならなっているとみなしているから、聞いてくださったということです。そして、盲目の者が癒されたということはあったとしても、生まれつきの盲人は聞いたことがないとして、ここに、この方がメシアではないか？ということも見えてきているのです。

34 彼らは答えて言った。「おまえは全く罪の中に生まれていながら、私たちを教えるのか。」そして、彼を外に追い出した。

パリサイ派は、彼を断罪しました。罪を母の胎内にいるときから犯している者だと断定し、そして、外に追い出しています。これで、彼はユダヤ人の共同体から追放されました。私たちも、時にイエスを自分の主として生きる時に、仲間から外されることがあります。日本にある社会的な制度、文化的なものからつまはじきにされるかもしれません。私が信仰をもって間もなくして、同じ教会に、自分の通っていた大学と同じ大学に通っていた学年の上の方が、信仰をもったら親から迫害を受けた話を聞きました。なんと家に帰ったら、部屋から自分のものが投げ出されていて、庭に散らばっていたというのです。しかし彼女が外国人のクリスチャンと結婚することになり、その結婚式の時にご両親も出席されたのを覚えています。

家族から拒まれても、親戚から拒まれたとしても、そこには報いがあるのです。それは、主ご自身は受け入れてくださるという報いです。

5A イエスの礼拝 35-41

1B 人の子 35-38

35 イエスは、ユダヤ人たちが彼を外に追い出したことを聞き、彼を見つけ出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」36 その人は答えた。「主よ、私が信じることができるように教えてください。その人はどなたですか。」37 イエスは彼に言われた。「あなたはその人を見ています。あなたと話しているのが、その人です。」38 彼は「主よ、信じます」と言って、イエスを礼拝した。

すばらしいですね、涙が出てきます。イエス様は初めから、これを待っておられたのです。「神のわざが現れるためです。」というのは、ここです。肉眼が見えるようになるだけでなく、そこから霊の目が開かれることです。彼が、世の光であるイエス様のところに来ることでした。これが、最終的な目的であり、神のわざです。このようにして、はっきりとご自身が人の子であると言われて、それで信仰へと導くのは珍しく、他はサマリアの女に対して明かされました。

美しい、救いのみわざです。主が初めに目を留められ、目を開かれて、そのことに邪魔が入り、なんと自分の仲間であるユダヤ人から追い出されるほどのことでありましたが、それでもイエス様が見えるようになりました。こうやって、彼は自分自身が信仰に至りますが、その過程で、イエス様に遣わされた宣教師のようになっていて、イエス様の証しを立てていました。

2B 「見える」という盲目 39-41

39 そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」40 パリサイ人の中でイエスとともにいた者たち

が、このことを聞いて、イエスに言った。「私たちも盲目なのですか。」⁴¹ イエスは彼らに言われた。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、今、『私たちは見える』と言っているのですから、あなたがたの罪は残ります。」

イエス様は、さばきのためにこの世に来られたと言っていますが、3 章 17 節では、「さばきのためではなく、救うために来た」と言われていました。これは矛盾していません、別の文脈で話しているからです。ここでは、見えると思っていた者が実は靈的に盲目であることが明らかになり、そして見えない者が見えるようになる、ということです。この元盲人のように、イエスという人という、人でしかなかったところから、イエスがキリストであり、主であり、礼拝されるべきお方であると、心の目、信仰の目が開かれました。けれども、パリサイ人は自分たちこそは、モーセの弟子であり、律法を知っていて、下々は無知であるがゆえに呪われているとぐらい考えていたでしょう。そういった彼らこそが盲目であることが、この 9 章を見ただけでも分かりますね。

矛盾していますが、イエス様が言われるように、「自分は見えていなかった」と認める時に、見えるようになります。いつも、心の目が開かれるように祈りましょう。いつも、主が見ておられるように自分も見ることができるよう祈りましょう。生まれつき盲目のような状況、苦しみ、混乱を見るときに、「いや、神のわざが現れるためなのだ」と知り、主の御心を大胆に行うことができるように祈りましょう。元盲人の両親のように、恐れて退くのではなく、御心を行って、イエス様にお会いする時に、主の前で礼拝できる時まで、走りぬきましょう。